

宮古島市内の出土銭貨について

久貝 弥嗣

はじめに

遺跡の発掘調査で出土する遺物には、土器や陶磁器などともに銭貨が出土することもある。宮古島市内においては、1 遺跡あたりの出土量はそれほど多くないものの、銭貨が出土する遺跡は比較的多い。この発掘調査によって出土した銭貨(以下、出土銭貨)は、現在の社会と同様の貨幣としての機能の他に、装身具や威信財などの機能を有することもある。

今回、筆者が出土銭貨を研究テーマとしたのは、グスク時代の中でも 13 世紀後半から 15 世紀前半の宮古島市内の出土銭貨が、沖縄諸島とは異なる地域的な特徴を有するのではないかと考えたためである。筆者は、これまで宮古島市内のグスク時代を大きく 3 つに時期区分するとともに、グスク時代の遺跡を 3 つのタイプに分類した(久貝 2014)。時期区分としては、Ⅰ期を 11 世紀後半・12 世紀前半から 13 世紀中頃、Ⅱ期を 13 世紀後半から 15 世紀前半、Ⅲ期を 15 世紀中頃から 16 世紀とした。さらに遺跡の分類では、住屋タイプ、高腰タイプ、元島タイプという 3 つの遺跡の分類を行ったが、宮古島市内のグスク時代で非常に地域性の高いタイプの遺跡を高腰タイプであるとした。高腰タイプの遺跡の特徴として、大きく以下の 4 点を挙げた。

- ①第Ⅰ期を初現とし、第Ⅱ期を最盛期としながらも 15 世紀前半に終焉をむかえ、第Ⅲ期へ継続しない。
- ②丘陵上部に立地し、石積遺構を有し、『雍正旧記』にもその記録がみられる遺跡が多い。
- ③与那覇原軍の伝承に関連する遺跡が多い。
- ④白磁今帰仁タイプ、ピロースクⅠ・Ⅱ、青磁無文外反碗、中国産褐釉陶器、宋銭に特徴的な出土状況を有し、同時期の沖縄諸島と異なる遺物組成の様相を呈する。

本論では、この 4 つの特徴の内の④の宋銭の出土状況を取り上げている。本論では、宮古島市内の出土銭貨について集成、整理を行い、先行研究による沖縄県内の出土銭貨と時期的、地域的な比較を行うことを主テーマとしたい。

1. 沖縄県内における銭貨研究

宮古島市内の歴史、考古学研究の中で、出土銭貨に関する論考は少ないが、下地和宏氏は、早くから北宋銭の出土に着目している(下地 1979)。下地氏は、高腰城跡とムイ島遺跡より表

面採集した北宋銭を手掛かりに野城式土器^{注1}との関係性についてふれている。野城式土器は、高腰タイプの主体となる土器であることから、本論のさきがけとなる論考である。

沖縄県内全域を対象とした出土銭貨の研究については、嵩元政秀氏、小畑弘己氏らによって集成、考察が行われており(嵩元 1970・1983、小畑 2003)、開元通宝をテーマとした論考(高宮・宋 1996、木下 2000)、清朝銭(知念 2004)、遺跡間の比較(長濱 2007)なども行われている。これらの研究史については宮城弘樹氏によってまとめられている(宮城 2008)。また、宮城氏は、県内の出土銭貨の再集成も行っており(宮城 2008、2014)、本論でもその集成をもとに地域間の比較検討の資料とした。

宮城氏の県内の出土銭貨の集成によれば、243 遺跡、26,009 枚にもおよぶ(宮城 2008)。宮古諸島については、渡来銭 18 枚、無文銭 4 枚、寛永通寶 7 枚の内訳となり、八重山諸島も含めた他の県内地域と比較すると少ない様相を示している。また、宮城氏は、沖縄県内の出土銭貨につて、I 期からVI期に時期区分を行っている(以下、宮城 I～VI期と称する)。本稿では、宮古島市内の出土銭貨の確認された宮城IV期～VI期を対象とした。宮城IV期は、明銭の出土しない、唐～元代までの王朝銭だけで構成される遺跡を対象とし、宮城V期については、出土する銭貨において、洪武通寶が最も多く、永楽通寶がこれにつぐ出土量を示し、明銭の占有率の高さは琉球の銭貨流通の特質であるとしている(宮城 2008)。また、宮城氏は、宮城IV期に位置づけられる遺跡について奄美・先島地域での事例が比較的多い点(宮城 2008)や、穿孔貨幣の出現頻度は宮古・八重山諸島地域の方が相対的に高い(宮城 2017)という地域的な特徴についても指摘している。宮城氏の指摘する宮城IV期に宮古・八重山諸島事例が比較的多いという指摘は、前述した高腰タイプの遺跡における宋銭の出土状況を示すものといえる。

2. 宮古島市内の出土銭貨

今回、宮古島市内遺跡の出土銭貨の集成を行った結果、15 遺跡、53 点の銭貨の出土が確認された(表 1)。牧の頂遺跡については、『沖縄歴史地図考古編』において、1 点の出土が報告されているが今回その詳細について確認することができなかった^{注2}。そのため、牧の頂遺跡の出土事例については本論ではとり扱っていない。また、宮古島市総合博物館に収蔵されている銭貨についても集成を行った(表 2)。いずれも遺跡からの出土品ではなく、H3 近世資料登録番号 1 の古銭 4 枚が狩俣での採集とされているが、その他については採集地が不明である。出土点数としては、寛永通寶が圧倒的に多いが、北宋銭が 1 点、清朝銭(乾隆通寶)が 2 点、天保通寶 1 点、不明 1 点の内訳となる。

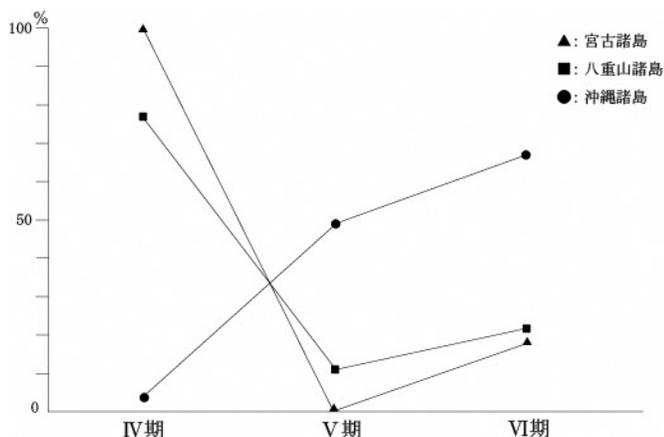
遺跡の時期区分については、一遺跡あたり 1～2 点という遺跡も多い。北宋銭は宮城IV期のみではなく宮城V期の段階からも多く出土することから、時期区分については出土銭貨のみ

からの判断は困難であるといえる。また、中国産陶磁器についても宮城IV期～V期をまたぐ遺跡がほとんどであることから明確な時期区分は困難である。本稿では、このような問題点を含むことを前提としながらも、明銭をふくまない遺跡については宮城IV期と位置付けておきたい。

その他、今回は銭種不明な資料に対しては、X線透過撮影を行い、可能な限りその種類について同定作業を行った^{注3}。以下、宮城氏の時期区分に従い、今回集成された宮城IV期から宮城VI期の出土銭貨の状況について考察を行っていききたい。

(1) 宮城IV期の出土銭貨

①出土遺跡の概要 宮城IV期は、前述したように明銭を伴わない時期の銭貨で構成される時期区分である。宮古島市内の遺跡で、宮城IV期に位置づけられる遺跡は、高腰城跡、大嶺城跡、ムイ島遺跡、住屋遺跡、住屋遺跡(俗称・尻間)、新里元島上方台地遺跡、友利遺跡、尻川遺跡、尻川遺跡(丘陵部)の9遺跡であり、寛永通宝や清朝銭などの明らかな後代の宮城第VI期の出土銭貨とともに組成されるという点を考慮するならば、友利元島遺跡も宮城IV期を包括する遺跡といえる。



第1図 宮城IV～VI期における各地域の出土銭貨

次に、これらの遺跡を筆者の遺跡分類に基づいて整理してみたい。分類の明確な遺跡としては、高腰タイプの遺跡が高腰城跡、大嶺城跡、ムイ島遺跡の3遺跡、住屋タイプの遺跡が住屋遺跡、住屋遺跡(俗称・尻間)、尻川遺跡の3遺跡、元島タイプの遺跡が友利元島遺跡の1遺跡となる。友利遺跡については、白磁のビロースクIIや今帰仁タイプの出土も見られるが、遺物の主体は久貝第III期に位置づけられることから元島タイプに類する遺跡と考え、北久場間岩陰墓については、青磁の皿や銭貨の出土はあるものの、近世～近代にかけての岩陰墓であることから遺跡分類の対象外としたい。

筆者は、これまで宋銭の出土状況を高腰タイプの遺跡の特徴の一つとしてきた。しかし、今回の集成作業では、高腰タイプだけではなく、住屋タイプ、元島タイプの遺跡からも多くの宋銭が出土している状況が確認できた。これは、遺跡のタイプによる出土傾向を示すのではなく、宮古島市内の久貝第II期の遺物組成の傾向として捉えることができると考えたい。

②出土銭貨の種類 宮城IV期の出土銭貨の種類については、表1のとおりである。高腰城跡

で10点、住屋遺跡で10点、尻川遺跡(丘陵部)10点の出土が全体の中での大きな割合を占め、その他の遺跡は2~4点とその出土量が少ない。このような出土状況を勘案しなければならないが、出土銭貨の構成について整理していきたい。

出土銭貨を出土量の多い順に並べると、最も多いのが5点で皇宗通寶、熙寧元寶、元祐通寶の3種で、次いで天聖元寶が4点、元豊通寶が3点、崇寧重寶が2点とつづき、他の銭種は1点のみの出土である。これらの出土銭貨は全て北宋代の銭貨で構成される。出土量の多かった、皇宗通寶、元祐通寶、元豊通寶は、沖縄諸島の宮城V期の出土銭貨の組成でも出土量が高い割合を示していることから、沖縄県内に搬入された出土銭貨の種類として主体的なものであったといえる。全体としての出土点数自体が低いことを考慮しなければならないが、高腰城跡と北久場間岩陰より各1点出土した崇寧重寶の出土状況はやや目立つものである。それぞれの規格から、いわゆる大銭に分類されるものである。沖縄諸島ではこのような大銭の出土比率が高いことはすでにご指摘のとおりである(小畑2000、宮城2014)。

③沖縄諸島・八重山諸島との比較 今回沖縄諸島、八重山諸島の出土銭貨について実見することはできなかったが、宮城氏の集成(宮城2007)をもとに、両地域と宮古島市内の出土銭貨について比較を行っていきたい。

まず、宮城IV期の沖縄諸島の遺跡としては、後兼久原遺跡(V層)、伊佐前原遺跡(7層)、屋良グスクが確認できる(宮城2007)。これらの出土銭貨を詳細にみていくと後兼久原遺跡(V層)においては、景德元寶が1点出土するが洪武通寶も1点出土していることから、宮城V期の遺跡の可能性が高い。伊佐前原遺跡(7層)からは元祐通寶が1点出土しており、屋良グスクからは熙寧元寶1点と天禧口寶^{注41}1点が出土している。これらの遺跡の他に、浦添城の調査では、調査区ごとの出土状況ではあるが、宮城IV期に相当する遺跡の状況をみてとることができる(長濱2008)。浦添城の調査区I(北宋銭4点)、調査区K(北宋銭18点、南宋銭4点)、調査区SH01 試掘第4~9層(北宋銭4点、南宋銭1点)においては明銭を伴わない出土状況が確認できる。また、今帰仁城跡の主郭(俗称本丸)で14世紀前半から14世紀中頃に位置づけられる第V層~第VI層(今帰仁城跡主郭時期区分第II期)では、第VI層より永樂通寶1点の出土があるが、第I~IV層の明銭が多量に出土する段階とは異なる宮城IV期の様相を示している。出土状況としては、第V層より北宋銭6点、南宋銭2点、元銭1点、不明・破片各1点の総数11点が出土し、第VI層より北宋銭5点、明銭1点の総数6点が出土している。浦添城跡や今帰仁城跡においては宮城IV期の出土銭貨を一定量確認することはできるが、伊佐前原第一遺跡、屋良グスクともにその出土点数は少ない。博多遺跡群においては、博多III期(13世紀後半~14世紀前半)において、銭貨の出土点数が最も多く、博多IV期(14世紀後半~15世紀前半)以降は、その出土点数が減少傾向にある(小畑2000)。博多III期は、新安沈没

船に 28 トンもの銅銭が積載されていたことから北宗銭を主体とした銅銭が多量に搬入されていたことがうかがえる。その一方で、宮城Ⅳ期における沖縄諸島の遺跡数、出土点数が少ないという点は、沖縄諸島の地域的な特徴と捉えることができる。

次に八重山諸島の宮城Ⅳ期の遺跡についても概観していきたい。八重山諸島の宮城Ⅳ期の遺跡として 6 遺跡 28 点を確認した(表 3)。ビロースク遺跡の 12 点が最も多く、その他の遺跡からは 1~5 点の出土である。宮古諸島と同様に、宮城Ⅳ期において沖縄諸島と比較して遺跡数、出土点数ともに高い傾向を示している(第 1 図)。

④考察 北宋代は、貨幣としての流通を目的として、銭貨の鑄造が活発に行われており、北宋以降においても北宋銭は貨幣としての機能を有しつつける。そのため、宮城Ⅴ期の段階でも、沖縄県内の遺跡においては、洪武通寶や永樂通寶とともに、北宋銭が高い割合で出土する傾向にある。年代観については、宮城Ⅳ期は、明銭を伴わない時期であることから、明確に明代以前に位置づけられる時期である。

宮城Ⅳ期の地域間における比較を行った場合、沖縄諸島に比して宮古、八重山諸島における遺跡数、出土点数が多いといえる。また、南宋銭はその出土比率が低いことを考慮しなければならないが、浦添城跡や今帰仁城跡の宮城Ⅳ期の出土銭貨の組成に南宋銭が含まれるのに対し、宮古・八重山諸島では南宋銭を含まず北宋銭と唐銭(開元通寶)のみで組成されていることも地域間の相違点とみてとれる。

前述したように、筆者はこれまで宮古島市内における宋銭の出土状況は高腰タイプの特徴とを考えていた。しかし、今回の集成作業によって高腰タイプという遺跡間での相違ではなく、久貝の第Ⅱ期(13 世紀後半~15 世紀前半)の宮古諸島内の遺跡の共通的な遺物組成であることが分かった。久貝の第Ⅱ期については、今帰仁タイプ白磁碗やビロースクⅠ・Ⅱ類の白磁を主体とする前半期と、青磁無文外反碗を主体としビロースクⅢ類を含む後半期に細分可能であると考えている。これらの遺物の年代をもとにするならば、前半期は 13 世紀後半~14 世紀中頃、後半期は 14 世紀後半~15 世紀前半に年代幅を設定することが可能ではないかと考える。この時期区分に、本稿の出土銭貨の出土状況を加えて考えてみるならば、宮城Ⅳ期は、明代以前、つまり 14 世紀中頃以前の段階と位置付けられ、今帰仁タイプ白磁碗やビロースクⅠ・Ⅱ類の前半期の中国産陶磁器と共伴関係にあったと考えられる。

今帰仁タイプ白磁碗やビロースクⅠ・Ⅱ類については、その産地や沖縄県内における出土状況がまとめられ、中国南部から台湾北部、八重山諸島、宮古諸島、沖縄諸島へ至る交易経路が提示されている(木下 2009)。筆者も本説に強い影響を受け、本稿における出土銭貨も含め、宮古島市内の当該期の出土遺物について整理を行ってきた^{注5}。その過程で、当該期における宮古・八重山諸島と沖縄諸島の間には、今帰仁タイプ白磁碗の出土量などの点も含め相

違える部分が多いように感じられた。本稿においては、この点について考察をおこなえるだけの根拠を提示することはできないが、当該期における交易の密度も含めた経路や範囲について今後の課題としていきたい。

(2) 宮城Ⅴ期の出土銭貨

①**出土遺跡の概要** 宮古島市内の出土銭貨の状況から宮城Ⅴ期に位置づけられる遺跡は確認されていない。言い換えるならば、現段階では明銭の出土は皆無であるといえる。沖縄諸島においては、宮城Ⅳ期とは対照的に宮城Ⅴ期は、出土銭貨が急激に増大する時期である(第1図)。その背景には、言うまでもなく1372年の中山王察度と明との冊封関係に始まる朝貢貿易があり、多量の中国産陶磁器とともに明銭を主体とした中国産の銭貨が沖縄諸島に搬入されたことが推察される。

八重山諸島の宮城Ⅴ期の遺跡としては、ヤマバレー遺跡と、新里村西遺跡の2遺跡3点が確認される。しかし、ヤマバレー遺跡出土の明銭は、萬曆通寶である。萬曆は、明の第14代皇帝神宗の在位時の元号であり、1573年から1620年までの48年をその年代幅としている。宮城Ⅴ期の明銭は洪武通寶と永楽通寶を主体に構成され、洪武は1368年～1398年、永楽は1403年～1424年という明代初期に位置づけられる。萬曆が、宮城Ⅵ期の始まりとする1607年をまたいでいる点や、洪武通寶や永楽通寶とは異なる銭種であることからヤマバレー遺跡については、沖縄諸島の宮城Ⅴ期の遺跡とは異なる様相を示しているものと捉えたい。そうなると、宮古・八重山諸島より出土する宮城Ⅴ期の遺跡は、新里村西遺跡のみとなる。新里村西遺跡は、青花を含まない点や、青磁が極僅かに雷文帯碗を含むものの、無文外反碗や玉縁状口縁碗などで組成されることから15世紀前半もしくは中頃までを遺跡の年代幅としてとらえることができる。この年代幅で捉えるならば、洪武通寶の出土は矛盾はしない。しかし、いずれにしても、八重山諸島における宮城Ⅴ期の遺跡は、新里村西遺跡のみといえる。

②**考察** 歴史史料にみるならば、那覇市通堂には1504年に宮古蔵^{注6}が設置されたとある。宮古蔵跡である渡地村跡は、2006年から2008年にかけて那覇市教育委員会によって発掘調査が行われている(那覇市教育委員会2012)。この発掘調査では、宮古島産の浅鉢の土器が多量に出土している。これは16世紀初頭の段階で、那覇港の宮古蔵と宮古島の漲水港が、両地域をむすぶ港口であったことを示すものと捉えられる。実際に、15世紀中頃以降からは、宮古島出土の中国産陶磁器は、沖縄諸島の中国産陶磁器と同様の組成を構成している。このような宮古蔵と漲水港をむすぶ交易は、宮古島の蔵元を介在した公的なものであったことが推察される。

その一方で出土銭貨の視点から両地域の比較を行うと、渡地村跡の発掘調査では明銭を主体として非常に多くの銭貨が出土しているのに対し、宮古諸島においては明銭が全く出土し

ていない。宮古島産の浅鉢や中国産陶磁器が同様の組成を構成することから両地域には、一定の公的な交易ルートが築かれていたことが推察される中で、明銭等の銭貨が全く出土しないという状況は、意識的に、宮古諸島へ銭貨を搬出していないことを示すものと考えられる。八重山諸島においても、今回の集成において明銭の出土が確認されたのは新里村西遺跡の 1 点のみであり、蔵元の置かれた石垣市街地の四箇村の遺跡からも明銭の出土がないことを考えるならば、八重山諸島においても意識的に銭貨を搬出していないものと考えられる。これは、宮城Ⅴ期の段階において、決済手段としての銭貨の貨幣的な価値は、宮古・八重山諸島において非常に希薄であったことを示しているといえる。

(3) 宮城Ⅵ期の出土銭貨

宮城Ⅵ期は、1609 年の薩摩進攻以後の近世琉球の段階である。宮城Ⅵ期の出土銭貨は、日本鑄造の寛永通宝と琉球鑄造の無文銭及び清朝銭で構成される。宮城Ⅵ期の宮古島市内の遺跡としては、友利元島遺跡より寛永通宝 1 点と無文銭 2 点、宮国元島より無文銭 2 点が出土するのみである。沖縄諸島においては、第 1 図に見られるように宮城Ⅵ期は宮城Ⅴ期よりもさらに出土銭貨が増加する状況がみられる。一方で、宮古島市内においては、宮城Ⅴ期と同様に出土銭貨の低調な時期であるといえる。出土銭貨ではないが、宮古島市総合博物館にも宮城第Ⅵ期の銭貨が収蔵されており、沖縄諸島でも出土数の少ない清朝銭の乾隆通宝が 2 点確認できる。

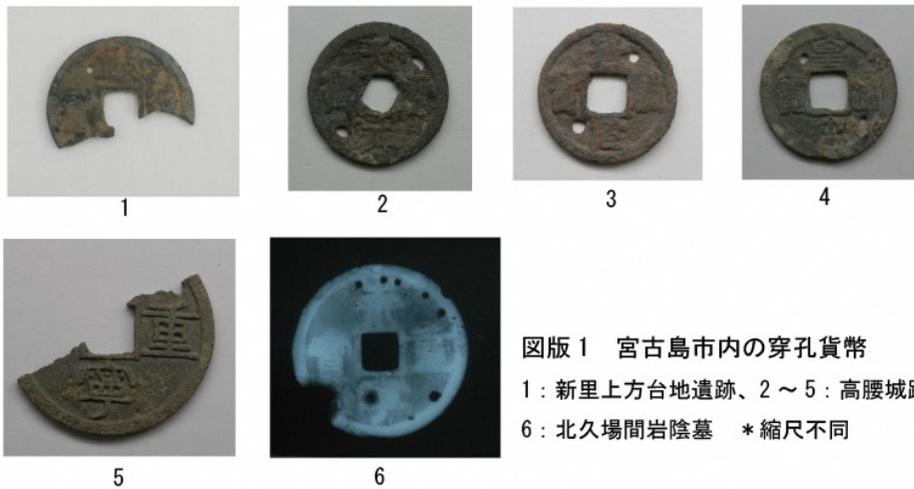
専門外ではあるが、1767 年にだされた与世山親方宮古島規模帳^{註8}から、近世の宮古島における売買などにかかる経済的な側面について考えてみたい。まず、本史料からは、明確な銭貨に関する記述は認められなかった。売買などにかかる取引方法に関する記述によれば、商売などの代価として、代粟、代布が使用されており、作業の報酬として手間米として米が支払われていたことなどがみてとれる。宮古島では、粟と布が琉球王府への貢租であったことを考えると、取引にかかわる代価の基準が粟と布であっても当然のことと考えられる。

このような近世琉球の歴史史料や出土銭貨の状況から、宮城Ⅵ期においても、宮古島市内において銭貨が、経済的な代価として中心的な役割を果たしていたとは考えにくい。

(4) 穿孔貨幣

穿孔貨幣とは、銭に意図的に孔を穿った銭貨である。沖縄県内においては、現在 26 遺跡 51 枚の貨幣が集計されており、その穿孔箇所によって分類が行われている(宮城 2017)。

宮古島市内においては、大嶽城跡より 1 点、高腰城跡より 4 点、新里元島上方台地遺跡より 1 点、北久場間岩陰墓より 1 点の 4 遺跡 7 点が確認された。これらの穿孔貨幣は、北久場間岩陰墓を除き、2 つの孔が穿孔されており、2 つの孔は斜位の対角線上に位置する(宮城氏分類の 2a)。もう 1 点の北久場岩陰墓の資料は 6 つの孔が穿孔され、県内でも類例のない穿



図版1 宮古島市内の穿孔貨幣

1：新里上方台地遺跡、2～5：高腰城跡、
6：北久場間岩陰墓 *縮尺不同

孔箇所となっている。宮古・八重山諸島における穿孔貨幣の出土頻度が、他地域に比べ高い点は指摘されており(宮城 2007)、穿孔箇所についても北久場間岩陰墓をのぞいてすべて 2a に分類される点も地域的な特徴といえることができる。図版 1-1～4 つについては錆の影響もあり、外見上はやや不定形な形態をなしているが、X 線透過撮影によるとほぼ正円に近い穿孔であることがみて、図版 1-5 については良好な状態での穿孔部位を確認することができる。この穿孔を行うという行為については、宮城Ⅳ期の沖縄諸島の事例には見られず、銭貨の出土傾向が同じである八重山諸島でも同様の穿孔を行うことから、同地域で穿孔した可能性が高いと考える。しかし、その穿孔を行う道具や方法については判然としない。また、使用方法については、銭貨が希少であったことなども含め紐を通しての装身具が考えやすいが明らかではない。

3. まとめと今後の課題

今回、宮古島市内の遺跡の出土銭貨の集成と若干の分析を行った結果について、下記のとおりまとめた。

- ・宮古島市内の出土銭貨は、15 遺跡より 53 点を集計した。
- ・出土銭貨の時期区分としては、宮城Ⅳ期が 10 遺跡、宮城Ⅴ期は 0 遺跡、宮城Ⅵ期は 2 遺跡、時期不明 4 遺跡となる。宮城Ⅳ期が最も多く、宮城Ⅴ期に減退する状況は、沖縄諸島とは異なる宮古・八重山諸島の特徴といえる。
- ・宮古島市内における宋銭の出土状況は、宮城Ⅳ期(明代以前)における宮古島市内の出土遺物の特徴を示す遺物で、白磁の今帰仁タイプ、ビロースクⅡ類と相伴すると考えら

れる。

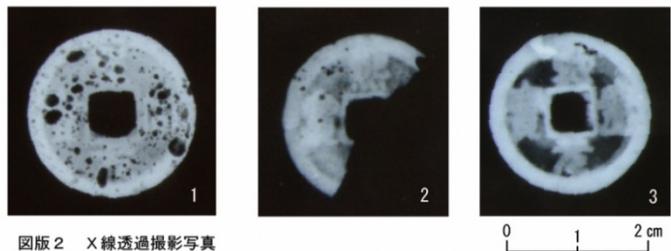
- ・宮城Ⅴ期において、明銭などの銭貨が宮古島で出土しない点や、宮城Ⅵ期においても出土銭貨の低調な状況は、当該期における銭貨の貨幣としての利用は希薄であったと考えられる。
- ・穿孔銭貨は、3遺跡7点が確認された。いずれも北宋銭であり、穿孔箇所は2aという共通性を有し、沖縄諸島では見られない穿孔箇所である。

これら5つのまとめにもみられるように、宮城Ⅳ期から宮城Ⅴ期にかけての出土銭貨には、沖縄諸島とは異なる地域的な特徴を確認することができた。このような地域的な特徴は、前述したように、島嶼間におけるヒトとモノの動きに伴っていると考える。

最後に、本稿では整理することができなかつた課題についてまとめてみたい。まず1点目として、今回、宮古島市内からは確認できなかった宮城Ⅲ期についても、無土器期における対外地域との関係性を考える上で重要な時期である。宮城Ⅲ期に位置づけられる開元通寶は、崎枝赤崎貝塚における10点の一括出土や、仲間第1貝塚、舟蔵第2貝塚における会昌開元の出土など、八重山諸島の無土器期を考える一つの重要遺物である。その一方で、宮古諸島は宮城Ⅲ期の出土銭貨が欠如している。これもまた、宮古諸島の一つの地域的な特徴を示している。

2点目として出土銭貨の計測についてまとめることができなかった。高腰城跡など一部の資料については計測が実施されているが、今後他の遺跡の計測資料とも併せて報告する機会をもちたい。

3点目として銭貨の品質をあげたい。今回X線透過撮影を行った中で明らかに粗悪品と考えられる出土銭貨が確認された(図版2-1・2)。粗悪品については、外見上はまったく他の出土銭貨と同じようにみえるが、X線透過撮影により間隙が多くみられる状況が確認できた。宮古島市内以外の地域における出土銭貨の状況については今回実見することができなかったが、X線透過撮影による銭種の判別については、県内でも実施例が多い。これらの作業を通してこのような粗悪品の割合について検討していくことで、搬出先である中国本土の状況も含め考察を行っていくことができると考える。



図版2 X線透過撮影写真

1: 聖元元寶(高腰第28図5)、2: 熙寧元寶(高腰第28図10)、熙寧元寶(高腰第28図2)

表1 宮古島市内遺跡出土銭貨集成表

遺跡名	銭種不明	点数	時期	文献
友利遺跡	皇宗通宝	1	IV	—
	元祐通寶	1		
	元祐通寶	1		
	銭種不明	1		
	総数4点			
友利元島遺跡	寛永通宝	1	IV VI	1
	皇宋通寶	1		
	鳩目銭	1		
	鳩目銭	1		
	総数4点			
高腰城跡	崇寧重寶	1	IV	2
	熙寧元寶	3		
	咸平元寶	1		
	天聖元寶	1		
	聖宋元寶	1		
	景祐元寶	1		8
	皇宋通寶	1		
	不明	1		
	紹聖元寶	1		
	総数11点			
大嶽城跡	崇寧重寶	1	IV	3
	総数1点			
住屋遺跡 (俗称 尻間)	熙寧元寶	1	IV	4
	総数1点			
根間・西里遺跡	不明	2	-	5
	総数2点			
宮国元島遺跡	無文銭	2	-	6
	総数2点			
牧の頂	不明1点	1	-	7
	総数1点			
ムイ島遺跡	元符通寶	1	IV	8
	総数1点			
保良元島	不明	2	-	9
	総数2点			
新里元島上方台 地遺跡	政和通寶	1	IV	10
	総数1点			
北久場間岩陰墓	崇寧重寶	1	IV?	3
	総数1点			

遺跡名	銭種不明	点数	時期	文献
尻川遺跡	開元通寶	1	IV	11
	紹聖通寶	1		
	総数2点			
尻川遺跡・丘陵 部*表面採集資 料	宋通元寶	1	IV	1
	天聖元寶	2		
	明道元寶	1		
	元豊通寶	1		
	皇宋通寶	2		
	元祐通寶	1		
	不明	2		
総数10点				
住屋遺跡	寛永通宝	1	IV	12
	熙寧元寶	1		
	元豊通寶	2		
	元祐通寶	2		
	紹聖通寶	1		
	天聖元寶	1		
	聖宋元寶	1		
	不明	1		
	総数10点			

表2 宮古島市総合博物館収蔵銭貨

分類名	資料名	点数	登録番号
H1考古資料	古銭(皇宋通寶)	1	H1-282
H3近世資料	古銭(寛永通宝・ 乾隆通寶・ 嘉?通寶)	4	H3-1
	乾隆通寶	1	H3-3
	寛永通寶	1	H3-8
H4近代資料	寛永通寶	26	H4-12
	天保通寶	1	H4-13
	寛永通寶	27	H4-61
総数: 61点			

表3 八重山諸島Ⅳ期の遺跡と出土銭貨

遺跡名	種類	点数	文献
カンドウ原遺跡 (石垣市磯辺)	不明	2	13
	皇宋通寶	1	
	総数3点		
山原貝塚 (石垣市登野城)	大平通寶	1	14
	至道元寶	1	
	嘉祐通寶	1	
	元祐通寶	1	
	景祐通寶	1	15
	総数5点		
与那良遺跡 (竹富町・西表島)	天禧通寶	1	16
	熙寧元寶	1	
	元豊通寶	1	
	聖宋元寶	1	
	総数4点		
桃里恩田遺跡 (石垣市大里)	祥符通寶	1	17
	総数1点		

遺跡名	種類	点数	文献
ピロースク遺跡 (石垣市新川)	開元通寶	2	18
	淳化通寶	1	
	祥符通寶	1	
	天聖元寶	1	
	皇宋通寶	2	
	熙寧元寶	2	
	元豊通寶	1	
	元祐通寶	1	
	元符通寶	1	
総数12点			
仲筋貝塚 (石垣市仲筋)	咸平元寶	1	19
	元符通寶	1	
	開元通寶	1	
	総数3点		

表4 八重山諸島Ⅴ期の遺跡と出土銭貨

遺跡名	種類	点数	文献
ヤマバレー遺跡 (石垣市米原)	萬曆通寶	1	20
	総数1点		

遺跡名	種類	点数	文献
新里村西遺跡 (竹富町・竹富島)	元符通寶	1	21
	永樂通寶	1	
	総数2点		

謝辞

本稿の作成にあたり、沖縄国際大学講師宮城弘樹氏、宮古郷土史研究会会長下地和宏氏より貴重な資料の提供をいただいた。高腰城跡の出土銭貨の X 線透過撮影に際しては、資料の借用について沖縄県立埋蔵文化財センターの新垣力氏にお世話になった他、撮影および所見について株式会社文化財サービスの青山奈緒氏にご協力、ご助言をいただいた。また、おきなわ銀行ふるさと振興基金助成研究の共同研究者である宮古島市教育委員会久貝春陽氏、株式会社アーキジオ本村麻里衣氏からは多くの知見をいただいた。末尾ではありますが記して感謝申し上げます。

本稿の作成にあたっては、平成 29 年度おきなわ銀行ふるさと振興基金を活用した。

注 1：論考の中で記された黒色(外耳)土器を野城式土器と解釈した。

注 2：「北宋銭の出土について」(下地 1979)の中で、「下地中の瑞慶覧久雄氏がザラツキ嶺の牧ぬ頂遺跡から採集した 1 枚の古銭があるが、明確に判読できないまま残されている」とある。嵩元氏の報告事例に相当するかは判断がつかないが、牧ぬ頂遺跡からの表採事例があったことを示している。

注 3：高腰城跡の第 34 図 2 は熙寧元寶、3 は威平元寶、4 は天聖元寶、5 は聖宋元寶、7 は景祐元寶、10 は熙寧元寶。友利元島遺跡の図版 80 の 1 は寛永通宝、2 は皇宋通寶、3~4 は鳩目銭である。友利遺跡の 3 点の出土銭貨については、宮古島市文化財資料室に収蔵されている未報告資料であり、2 点は元祐通寶(注記は県道友利東 C-4-II、7/31 中央 B とある)、もう 1 点は道光通寶(注記は 6-14-11. 161 とある)。

注 4：口の部分は判読不可能を占めず。

注 5：2017 年 7 月よりおきなわ銀行ふるさと振興基金の助成を受け、『伝説の争乱・与那覇原軍』に関する研究で、中国産陶磁器の出土状況について整理を行っている。

注 6：宮古御蔵は、宮古・八重山の貢租を収納・管理する所で、大屋子 2 人、筆者 2 人、下代 2 人がいて、その業務にあたったという(『那覇市史』通史第 1 巻前近代史より)

注 7：下地和宏氏表面採集資料

注 8：宮古島市史資料 3『与世山親方宮古島規模帳』(宮古島市教育委員会 2010)を参考とした。

<参考文献>

- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2001 年 『伊佐前原第 1 遺跡-宜野湾北中城線(伊佐~普天間)道路改築事業に伴う緊急発掘調査報告書(Ⅲ)-』沖縄県立埋蔵文化財センター報告書第 4 集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2004 年 『後兼久原遺跡-米軍送油管に係る緊急発掘調査報告書-』

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 22 集

- 小畑弘己 2003 年 「出土銭貨からみた琉球列島と交易」『先史琉球の生業と交易-奄美・沖縄の発掘調査から-改訂版』熊本大学文学部
- 嘉手納町教育委員会 1994 年 『屋良グスク-屋良城跡公園整備計画に伴う範囲確認調査-』嘉手納町文化財調査報告書第 1 集
- 木下尚子 2000 「開元通宝と夜光貝-7・9 世紀の琉・中交易試論-」『琉球東アジアの人と文化』高宮廣衛先生古希記念論集 高宮廣衛先生古希記念論集刊行会
- 久貝弥嗣 2014 「宮古のグスク時代の展開に関する一考察」『南島考古』No.33 沖縄考古学会
- 下地和宏 1979 年 「北宋銭の出土について」『会報』No.29 宮古郷土史研究会
- 高宮廣衛・宋文薫 1996 年 「琉球弧および台湾出土の開元通宝-特に 7~12 世紀ごろの遺跡を中心に-」『南島文化』第 18 号 沖縄国際大学南島文化研究所
- 嵩元政秀 1970 年 「沖縄県内出土の銭貨について」『南島考古』第 1 号 沖縄考古学会
- 嵩元政秀 1983 年 「出土銭貨の分類と特徴」『沖縄歴史地図<考古編>』柏書房
- 知念隆博 2004 年 「清朝銭について」『沖縄埋文研究』2 沖縄県立埋蔵文化財センター
- 長濱健起 2008 年 「浦添城跡の出土銭貨-新・旧中山王城における銭種構成の比較-」出土銭貨研究第 15 回研究大会『出土銭貨からみた環シナ海と琉球史』資料集 出土銭貨研究会
- 那覇市教育委員会 2012 年 「渡地村跡」那覇市文化財調査報告書第 91 号
- 宮城弘樹 2008 年 「琉球出土銭貨の研究」『出土銭貨』第 28 号 出土銭貨研究会
- 宮城弘樹 2010 年 「第 3 章中世の銭と琉球王国」『沖縄県史各論編第 3 巻古琉球』沖縄県教育委員会
- 宮城弘樹 2017 年 「琉球列島における貨幣認識と貨幣利用の多様性」『南島考古』第 36 号 沖縄考古学会

<表 1、3 の出土銭貨遺跡一覧にかかる文献>

1. 城辺町教育委員会 2004 『友利元島遺跡』
2. 城辺町教育委員会 1989 年 『高腰城跡-範囲確認調査報告書-』城辺町文化財調査報告書第 5 集
3. 宮古島市教育委員会 2011 年 『宮古島の岩陰遺跡-沖縄県宮古島市内遺跡発掘調査-』宮古島市文化財調査報告書第 4 集
4. 平良市教育委員会 1983 年 『住屋遺跡(俗称・尻間)発掘調査報告』
5. 宮古島市教育委員会 2006 年 『根間・西里遺跡』宮古島市文化財調査報告書第 1 集
6. 上野村教育委員会 1980 年 『宮国元島遺跡』
7. 宮城栄昌・高宮廣衛編 1983 年 『沖縄歴史地図考古編』柏書房
8. 下地和宏 1979 年 「北宋銭の出土について」『会報』No.29 宮古郷土史研究会

9. Erika Kaneko and Herbert Melichar 1972 年 「Pura Mutuzuma Archaeological Work on Miyako Island, Ryukyus」 『Asian and Pacific Archaeology series』 No.4
10. 沖縄県立埋蔵文化財センター 2002 年 『新里元島上方台地遺跡・新里元島遺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター報告書第 7 集
11. 平良市教育委員会 2003 年 『尻川遺跡』 平良市埋蔵文化財調査報告書第 5 集
12. 平良市教育委員会 1999 年 『住屋遺跡』 平良市埋蔵文化財調査報告書第 4 集
13. 石垣市教育委員会 1977 年 『八重山石垣間カンドウ原遺跡発掘調査報告』 沖縄県石垣市文化財調査報告書第 2 集
14. 石垣市教育委員会 1984 年 『山原貝塚発掘調査報告書』 石垣市文化財調査報告書第 8 集
15. 石垣市教育委員会 『山原貝塚発掘調査概要』
16. 三上次男ほか 1982 年 「沖縄・西表 与那良遺跡発掘調査概報」 『青山史学』
17. 石垣市教育委員会 1982 年 『桃里恩田遺跡沖縄県石垣市桃里恩田遺跡試掘調査報告書』 石垣市文化財調査報告書第 5 号
18. 石垣市教育委員会 1983 年 『ピロースク遺跡』 石垣市文化財調査報告書第 1 号
19. 仲筋貝塚発掘調査団 1981 年 『仲筋貝塚発掘調査報告』
20. 沖縄県教育委員会 1980 年 『大田原遺跡・神田貝塚・ヤマバレー遺跡』 沖縄県文化財調査報告書第 30 集
21. 沖縄県教育委員会 1990 年 『新里村遺跡』 沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第 97 集